

## 第 15 回日本古典文学学術賞選考講評

山本嘉孝氏『詩文と経世—幕府儒臣の十八世紀』

(名古屋大学出版会、2021 年 10 月刊)

江戸時代の漢詩文研究は、主として荻生徂徠、伊藤仁斎、林家などの個別の学派が争点となるか、もしくは、江戸後期の民間の詩人の詩作を対象に、分厚い研究が蓄積されて来た。山本嘉孝氏は、これを偏重として一步を踏み出し、十八世紀「幕府儒臣」と、その文事に着目して江戸時代の漢詩文研究に新たな領域を切り拓かれた。特筆すべき点は後述するが、丁寧に読み応えのある考証と、考証に立脚した論旨の展開は卓越しており、全編を通じて、幕初から幕末・明治にいたる通史的な視野が保たれていることも、本書を見晴らしのよいものになっている。

第一部「木門の儒臣の詩文と擬古」は、徂徠一門に先行する木門(木下順庵門下)の室鳩巢の漢文書簡、鳩巢と新井白石の詩文の精緻な分析を通じて、江戸中期(正徳～寛政)の幕府儒臣の詩文制作にみられる「擬古」の態度に、徂徠学派が盛唐詩を模倣する「擬古」とは異なる解釈を示す。この捉え直しはきわめて清新である。すなわち、「擬古」には両義があり、①は「盛唐詩を筆頭とする六朝・唐代・宋代の詩に登場する」古人の言葉の模倣、②は「道義的な観点・関心から古人に自身を擬える」ことだと定義した上で、①は典拠となる故人の言葉に寓意を託して、婉曲表現を可能にし、②は、その寓意を介して現状を批判、あるいは古人に自分を重ねて、自身の現実が表現されているという。この「擬古」の態度のうちにあるものは何か。それは、唐土の士大夫にはあらず幕府儒臣の学問は軽んぜられており、儒臣の立場では、自身の学問によって直接に「経世」に関与する実行力をもたない。その不遇意識であるという。ここに儒臣が詩文を作るということの根元的な動機があり、それゆえ寓意を託す「擬古」という手法には必然性があることが分かる。その点で「擬古」は儒臣の表現行為においては、模倣にとどまらず創造的な態度といえる。

第二部「武家の言語空間と幕府儒臣」は、寛政期までは幕臣が儒学・漢詩文の知識をもたなかったことに鑑み、その育成にあたっては、鳩巢の建議書(候文)、鳩巢門下の中村蘭林の詩文論と和歌が利用された実態を示す。その門下の柴野栗山が提唱した寛政六年の「学問吟味」には在野の儒者の学問も撰取されたという。これらの指摘に、在野の儒者の役割が認められ、幕臣の教育には、広く柔軟な方策がとられていたことを知る。

第三部「諸芸の流行と経世家」は、江戸後期の明代詩論の受容がもたらした、俗への志向を背景に、民間に「遊芸」として流行した漢詩文を経世家の目でとらえ、明代古文辞説にも接した祇園南海の「竹枝詞」、鳩巢門下の樫田北岸における袁宏道の受容と插花論、在野で経世家の視点に立つ山本北山の技芸論、また幕末の幕臣として明治を迎えた、林鶴梁の作文論にまで言及する。とりわけ「遊芸」は、漢詩文においては従来にみられない観

点で、いずれについても未開拓の論点が提示されている。

以上、新見に満ちた論旨は「詩」と「文」の双方において十八世紀漢詩文研究の見直しを迫るものであり、のみならず、文学史においても最新の成果といい得る。なお、結語にいう「朝（官）野論」（儒臣が官と在野を結ぶ）も、近年議論される「雅俗論」を相対化し、かつ補完する視点として重要であろう。

（文責 廣瀬 千紗子）